

はれないものも收められてあるが、兎に角此の種のもは僅少の數に止まらず存在したものと思はれる。其の後我が國に傳つた一神論^②があり、また志元安樂經、宣元至本經の二景典が、李（盛鐸？）氏の所藏に歸して居ることも知らるゝに至つた^③。李氏所藏の二部は、前記の尊經中に景淨の譯出として記されて居るものであつて、この點からも人の注意を惹くものである。然も此等の中、從來世間に公にされたのは、たゞ上の景教三威蒙度讚と、一神論の一部分とに過ぎない。此の際新にこの序聽迷詩所經の殘卷を公にすることの出来るのは、自分の深く幸とする所である。

四 殘經の轉寫

殘經中の文字には、字畫の正しからぬものが甚だ多く、これをすべて其の儘に活字で示すことは困難である。それでこゝには誤字にして疑ないものは正しい形で示し、疑あるものは其の儘の形で寫すことにした。原本は他日玻璃版などで出版される機會があらうから、原形を知らうとする人はそれに據られたい、各行の文字の數はすべて原本に據り、五行毎に附した數字は便宜の爲に自分の加へたものである。

1 序聽迷詩所經一卷

5 天阿羅漢誰見天尊在於衆生無人得見天

爾時彌師訶說天尊序娑法云異見多少

尊何人有威得見天尊爲此天尊顏容似

誰能說經義難息事誰能說天尊在後

風何人能得見風天尊不盈少時巡歷世間居

顯何在停止在處其何諸佛及非人平章

編爲此人人居帶天尊氣始得存活然始